『漢末水滸伝』

佐藤ひろお

◆第一回　梁冀

後漢の順帝の御代、建康元（一四四）年、正月、天子は百官を前にして詔した。

「涼州では、昨年の九月より、地震が百八回も起き、山谷は裂け、建物は壊れ、人民が死んだ。夷狄は叛き、賦役は重く、内外で怨みが蓄えられており、嘆くべき状況である[一]。恩沢を施して、人民を救いたいと思う。なにか良い方法はないか」

これを受け、尚書令の袁湯がいう。

「百八回の地震は、漢家に終焉が近づいていることを暗示しています」

「終焉？」

天子が気色ばんだ。

「ご心配には及びません。南華老仙[二]という道士がおります。荘子の生まれ変わりと言われています。彼に祈祷させれば、漢家の天命は、少なくとも二百年は延びるでしょう」

老臣らが口を出した。

「怪しげな仙人に頼るのとは……、世も末だな。まさに漢末の到来というわけだ」

「しかし祈祷で解決するのならば……」

「いや待ちなさい。政道とは、そもそも……」

朝儀は二つに割れた。しかし、有効な代替案が出ないことと、袁湯が二世三公の家柄であり、優れた学識を持っていることから、合意に至った。

「だれが南華老仙を訪ねるか」

「陛下が赴かれるべきです」と袁湯。

「朕には政務がある」

「ならば、大将軍の梁冀さま」

「わ、わしか？」

指名された梁冀は、天子のそばで、ふんぞり返っていた。張り出した肩、鋭く尖った目をした外戚である。黄色く濁った瞳で、袁湯をにらんだ。

「なぜ、わしが行かねばならん」

「漢家の一大事です。天子の代理は、大将軍にしか務まりません。南華老仙は、虎龍山[三]にいます」

「行ってくれ」

天子が丁寧に頭を下げた。

御意を受けた梁冀は、いとまごいをして、数十人の従者を連れ、駅馬に乗って洛陽を去った。

一ヶ月後、虎龍山のふもとに着いた。道士が、附近に集住している。

南華老仙の居場所を聞くと、

「祖師は、俗世間から超絶した御方でありまして、山上に庵を結んでおられます」という。

「天子の詔を預かってきた。お前らが、ちょっと行って、祖師とやらを呼び出せ」

「できません」

「わしは大将軍だ。命ずれば、この一帯の住民を全て殺すことも難しくないぞ」

「横暴な――」道士が抵抗した。

「うるさい」

首が刎ねられた。

「お待ちください」

べつの道士が走り出た。

「祖師は山頂に住んでいますが、雲に乗って飛び回ることができ、詳しい所在は誰にも分からないのです。ここに呼べるかどうか」

「また逆らった！」

梁冀が剣を振った。ふたつめの死体ができた。これらを避け、べつの道士が説く。

「これ以上、修行の場を血で汚さないでくれ」

「なんだと」

さらに剣を一閃させたが、空を切っただけである。わずかな距離で、道士が身をかわした。

「大将軍よ、もし天子さまに、本当に人民を救おうという気持ちがあるなら、まずあなたが真心を表し、斎戒沐浴して、質素な衣服をまとい、従者など連れず、武器など持たず、詔書を背負って、香を焚きながら祖師を訪ねなさい。さすれば、きっと祖師に会えるでしょう」

「わしに山を登れと？」

梁冀は、肥満した腹に手をやった。三度、剣を振っただけで、すでに息が上がっている。

「天子の代理が、そんな態度では、漢家の末期も近いですな」

「うぬ……」

彼の血筋を遡れば、後漢の建国を輔けた、梁統という人物に行きつく。この王朝は、功臣の子孫から皇后を迎え、外戚として優遇してきた。みずからの命運が、王朝とともにあることを骨身に染みて知っている梁冀は、登山を承諾した。

翌日、銀の手炉を提げて、香をくゆらせつつ、虎龍山を登った。行きがけに、

「万民を救おうとするなら、なにがあっても途中で引き返してはいけません」
と念を押された。
日が高くなっても霧が晴れず、山頂が見える気配もない。梁冀は、頭頂から水をかぶったように汗みどろになり、香炉をしきりに左右の手に持ち替え、肺腑に穴があいたような音を立てて、重くなった脚を前に出した。
「わしは、漢家の高官である。洛陽に帰れば、ふわふわの寝床があり、食器には美食を満たし、何十日でも出仕せず、享楽を味わうことが許されている。それが、粗末な草履を履いて、険しい山道を歩かされようとは。これは、袁湯の陰謀か――」
怨み言を吐きながら、座りこんだ。
そのとき、山あいから、さっと風が吹き起こり、木々の合間から、大きな影が躍り出た。
「虎だっ」
残忍そうな目をした白額の虎である。従来、見たことのある虎より、二回りも大きい。わっと悲鳴をあげて、仰向けにひっくり返った。
恐ろしさのあまり、目を閉じて、虎が通り過ぎるのを願った。しばらくの静寂の後、そっと薄目を開けた。すぐそばに、虎の巨大な顔があった。
気絶した。
目を覚ますと、虎は消えており、薄暗い霧だけが視界を覆っていた。
「助かった。しかし、天子が気まぐれな戯言を信じたせいで、わしがこんな目に遭わされた。毒でも使って、天子を殺してやろうか……」
ぶつぶつ言っていると、視界の端から、太い管のようなものが落ちてきた。ひとの身長の数倍はある大蛇である。落下の勢いで地に弾かれ、白い鱗を鳴らしながら、近寄ってきた。
「もうだめだ」
香炉を投げ捨て、走って逃げた。岩を見つけたので、後ろに身を隠す。しかし、岩の上から蛇が顔をのぞかせ、毒気のある息を吹きつけた。
――わしが毒殺なんて言ったから。
おかしな後悔をしながら、うずくまった。道士の言ったとおり、従者も武器も伴っておらず、蛇と戦うことができない。顔をしわしわにして、堅く目を閉じ、蛇が消えるのを待った。
いつのまにか眠ってしまい、起きたときに蛇は消えていた。再び香炉を持ち、登山を再開した。臆病が染みついた梁冀は、周囲に聞き耳を立て、ゆっくりと進む。
汗が冷えて、ひどく寒い。
「笛の音だ」
遠くから旋律が聞こえ、少しずつ近づいてくる。笛吹きならば怖くなかろうと、梁冀はその場で待つことにした。ひとりの童子が黄牛に横乗りして、鉄笛を奏でながら現れた。
「おじさん、梁氏だね」
「わ、わしを知っているのか」
「祖師さまに会いたいんだろ？」
「仙人はどこだ」
「今朝、草庵で食事を出したとき、祖師さまが仰っていた。天子が、梁という高官に詔書と御香を持たせて、祈祷の依頼に来るらしいぞって。でも、祖師さまは、もう山にはいないよ。おじさんは引き返したほうがいい」
「嘘をつくな」
「祖師さまは、鶴に乗って雲を駆け、もう洛陽に向かったんだ。この辺りは、猛獣や毒虫がいる。早く帰ったほうがいいと思うけどなあ」
「でたらめばかり」
と叱りながら、不思議に思った。なぜこの子供は、事情に詳しいのだろうか。
――さては、仙人の指図だな。
梁冀は、一切の事情を理解した。仙人とやらは、子供をつかって、「無駄足になるから帰れ」と言わせ、覚悟を試しているに違いない。しかし、虎や蛇に会っても逃げなかったのに、子供に言いくるめられて帰るなんて、馬鹿げている。意地でも山を踏破してやる、と決心した。
「そこをどけ。わしは登る」
「ふふふ」
「何がおかしい」
「いい大人が、むきになるのって、面白いなと思って。でもその本気さは、嫌いじゃない」
「生意気な」
梁冀がこぶしを振り上げると、童子は黄牛とともに消えてしまった。
「あいつも怪異の類いだったか」
暗くなり、疲労が濃くなったので、道を引き返すことにした。
「皆でおれに苦労をさせて、笑っているのではないか。天子も、袁湯も、仙人も……」
徒労感に包まれた。
登るときは苦労したのに、帰り道は、拍子抜けす

るほど短かった。ふもとで道士らに出迎えられ、そまつな方丈で腰を下ろした。
「祖師さまに会えましたか」
「会えなかった」
「えっ」
道士の表情に、軽蔑の色が浮かんだ。天子の詔を帯びて、国家のために山に挑んだのに、途中で引き返してしまうとは――。
「わしは大将軍だ。よくも怖い思いをさせたな。洛陽に帰ったら、お前たちを逆賊だと報告する。この辺りを更地にしてやるぞ」
「怖い思い？　何があったんです？」
「何でもない」
威信を傷つけられたので、梁冀はとっさに腰に手をやるが、剣がない。仕方なく、道士との問答に付き合ってやることにした。
「丘のように巨大な虎。猛毒を吐く、長大な蛇。よくもこんな場所に、わしを行かせたな」
「まさか。このあたりに、そんなものは生息しておりません。きっと祖師さまが、お心を測るために、幻覚を見せたのでしょう」
「わしを試すとは……。仙人も殺す」
憤然と、地を踏み鳴らした。
「他に何か、見ませんでしたか？」
「牛に乗った子供。笛を吹いて、適当なことを、べらべらと喋りやがった。わしのことを知り、詔のことを知り、仙人が洛陽に飛んだとも言った」
道士らが顔を見合わせて、にんまりした。
「なんだ。気持ちが悪い」
「大将軍の両目は、節穴でいらっしゃる。その子供こそ、祖師でしょう」
「汚らしい子供だった」
「祖師は、いかなる姿にもなれます」
「いよいよ奇怪だ。討伐せねば」
「できるものですか。あなたが洛陽に戻られたら、天子に確認なさいませ。祖師は、とっくに祭祀を済ませておられるはず」
梁冀は、つばを吐いた。
「くそっ――こんな貧乏くさい衣服では、くさくさする。早くわしの衣服と剣を返せ」

一泊して、翌朝、出発の準備をした。ふと見渡すと、裏手に道観が見える。
「観光したくなった」
有無を言わさず、道士に案内をさせ、道観のあいだを巡った。梁冀の建築は趣味である。珍しい構造、新しい彩色を見つけては、熱心に質問をした。妻の孫氏も同じ趣味を持ち、二人で腕前を競っている。[四] 世間の目に触れない、山奥の道観から着想を得れば、きっと妻を凌ぐことができる。
「ん？　あれはなんだ」
高くそびえる岩壁の中ほどに、朱塗りの扉を見つけた。いかつい錠前が掛けられ、戸板には十数枚の封じ札が貼ってある。
軒には紅の漆地に、金の文字の額があり、
伏魔之殿
と読めた。
梁冀は岩壁の麓に立って、手をかざした。
「何だあれは」
「周代に、魔王を封じた社殿です」
「なぜ、かくも厳重に封じ札を貼ってある？」
「管理者が交替するたび、手ずから札を貼ります。後世、みだりに封印を解くことがないよう、手続が定められています。錠前に銅を流して固めてあり、なかを見た者はいません」
「見た者がいないのに、なぜ魔王だと分かる」
「確かな言い伝えです」
「ふん。伏魔、という額縁から連想した、いい加減な作り話であろう」
「あ、そうだ。あの封印を解いたひとが一人だけいたそうです。亡秦の始皇帝です。天下を巡察したとき、当地に立ち寄りました。解き放たれた魔王により、亡秦は二代で国が滅びたのです」
「早速、話がおかしいぞ。封印したのは、周代ではなかったか」
「おかしくはありませんよ。前漢の建国の功臣、留侯の張良さまは、晩年、政治から引退して、道術を究めました。ご存知でしょう。あれは、魔王を再び封じるためだったのです。漢家は、これを封印している限り、安泰です」
「よくも口から、嘘ばかり出るものだ。みだりに伝説を喧伝して、朝廷や良民をたぶらかし、教団に箔を付けようという魂胆なのだ。わしは、おおくの書物を読んだが、魔王を封じた話など知らぬ」
「あなたが知らなくても、確かなことです」
「戸を開けよ。魔王がいるなら、見てやろう。封じるどころか、退治してやる。根本的な解決だ」
梁冀が腕を揉みほぐした。
「いけません」
「どうしても見せぬなら、朝廷に帰って、詔をもら

うことにする。お前らを誅殺し、ここを更地にするためのな。その後で暴いても、遅くない。わしの仕事を妨げたのは事実だから」

梁冀は、前日からの鬱憤が溜まっていたから、朝廷の威光を使って、脅迫した。

道士らは魔王を恐れつつも、生活空間を破壊されては困るし、生命を略奪されては、なおさら困る。岩壁に足場を組み、錠前を焼き切った。札を剥がして重い扉を開き、なかに飛びこんだ。洞窟のなかは暗闇であり、ひんやりと寒かった。頭上から落ちる雫に怯えながら、奥へ奥へと進んだ。

「きゃ」

先頭で松明を持つものが、悲鳴をあげた。

「誰かいる」

見れば、亀を模した台石のうえに石碑がある。これが人影に見えたらしい。

「魔王の正体とは、これか」

豪快に笑い、梁冀は石碑を蹴り飛ばした。

「お待ち下さい。なにか文字が彫ってあります。火を近づけて、もっと……もっと……」

おもては古代の文字で書かれて、だれにも読むことができない。裏面には、現代の文字がある。

遇梁而開

という四文字である。

「梁に遇ひて開く」

だれかれともなく、音読した。梁冀は、すっかり悦んで、宣言した。

「お前らは、封印を解くのを拒んだが、わしの姓が数百年前からここに書いてある。確かな予言、既決事項だったのだ。どうやら魔王は、この石の下にいるな。掘り起こせ」

「開けてはいけません。これはきっと、魔王の罠です。予言ではなく――」

「もう我慢ならん。お前らのような道教徒は、ひとを困惑させて嘲笑する、許しがたい連中だ。現実だと思ったら幻想、童子だと思ったら老師、魔王と思ったら聖者。目まぐるしく正反対のものを見せ、俗世間のひとに恥を掻かせるのが、常套手段だろう。とうの昔に、見抜いたわ」

「いけません、本当にいけません。今度ばかりは、本当にいけません」

「どけ」梁冀が、すがる人々を斬った。「掘るか、死ぬか。どちらか選べ」

「――」

道士は、掘削の道具を運び、石碑のまわりの土をひっかいた。大きな一枚岩が出てきた。力を合わせてこれを砕くと、深い穴が口を開けた。

たちまち地震が起きて、洞穴の天井から大小の石を振らせた。揺れが収まると、穴のなかが光った。梁冀が覗きこむと、突如、黒い煙が噴き上がった。煙を吸いこんだ彼は、

「逃げろ」

と指示を飛ばした。もはや、身分も年齢も関係なく、みなで伏魔之殿から退散した。梁冀は、足場から道士を突き落として、我先にと離れた。

「何が起きた」

振り返ると、開け放たれた扉から、無数の金色の光があふれ、上空に昇り、全方位に散らばった。

「大変だ……」

道士は頭をおおって、地に臥せった。

「魔王のこと、詳しく話してくれ」

腰を下ろし、少しだけ神妙になった梁冀が、辞を低くして聞いた。しかし、学識のある人物は、あらかた斬られてしまい、だれにも詳細が分からない。魔王の員数は百八であり、ひとの世に混乱をもたらすらしい、とだけ判明した。

「とにかく、見たことの口外は禁ずる。もしも噂を流したら、九族を殺すであろう」

朝廷の従者から、道観の下っ端まで、居合わせたもの全てに口止めをした。

梁冀が洛陽に復命すると、天子は、

「先日、南華老仙が現れて、祭祀をやってくれた。おかげで今年は、国内は豊作、国境は平穏となるだろう。大将軍はご苦労であった」

と財物を賜った。

この天子は、治世の安定を願いながら、同年の八月に崩じた。二歳の太子が即位したが、翌年の正月に崩じた。つぎの天子は、梁冀に逆らったので、毒の入った煮餅を食わされて崩じた。

「三年以内に、天子が三人も崩じたか……」

心配そうな顔をするのは、袁湯である。南華老仙を紹介して、梁冀を虎龍山に行かせた人物である。せっかくの祈祷にも関わらず、王朝が安定しないのを憂えた。

「漢家は、魔物に憑かれたようだ」

仲間の高官たちと談笑したとき、それとなく梁冀を批判した。朝臣のだれが見ても、天子を毒殺した梁冀は、魔物である。

「そうそう、まさにそうだ」
「魔物にちがいないぞ」
互いに目配せして話を合わせたが、所詮は袁湯への追従である。
元来、官僚とは、昇進のために謀略をめぐらせる生き物である。袁湯の言葉を、梁冀に耳打ちしたものがいた。袁湯が失脚すれば、座席がひとつ空き、序列が繰り上がるからである。
「そうか、袁湯がそんなことを……」
告げ口した男の予想に反して、梁冀は怒らない。魔物、という響きに、心当たりがあったからである。しかし、余人の知るところではない。
「つぎの天子は誰がいいかな」
かえって梁冀は、袁湯に相談を持ちかけた。もしかしたら袁湯は、封印が解けたことを悟ったかも知れない。ならば、自派に抱きこんでおくべきだ、という判断であった。
協議の結果、袁湯の推薦した皇族が、つぎの天子となった。

閏六月、儀礼が行われた。
百官が参列する前で、「天」に対して、即位を報告する。告天文が中盤まで読まれたとき、快晴だった空がにわかに掻き曇り、昼間だというのに、己の手のひらが見えないほどの闇に覆われた。
「目が変になった」
「いや、光がないのだ」
「この即位は、もしや不祥なもの」
「天が、お怒りじゃ」
官僚群は、前代未聞のできごとに驚き、無責任な憶測を口にした。
「梁冀さまが、まえの天子を毒殺したという噂は、本当だったのか。だから、天子の交替を天がお認めにならない」
「漢家の天命は、はや尽きた――」
参列者は、すっかり統制を失った。
列の筆頭にあって、眩暈のために膝をついたのは梁冀である。この闇に、見覚えがあった。伏魔之殿から吹き出した煙である。いよいよ魔物が、漢家を食い尽くしにきたか、と諦めた。
そのとき、天頂に二筋の光が現れた。
「流星だ」
ひとりが指させば、みなが視線を集める。
「二つある」
「こっちに来る」
恐慌が起きた。
逃げるひとが、隣のひとを蹴り倒し、倒されたひとが踏み潰され、踏み潰されたひとが泣き叫び、左右のひとに掴みかかる。
「あっ」
二筋の光は、地上に落ちた。
「市街だな」
「うん、洛陽の城中だろう」
直後、空は快晴に戻った。流星の直撃を免れ、生き残ることができた官僚群は、咳払いをして威儀を整え、隊列を組み直した。
あわれな天子は、土壇の上で腰を抜かして失禁していた。
天子を策立した功績により、袁湯は司空の地位を得た。三世三公である。
「ますます袁氏は栄えるだろう」
充足感で胸を満たし、袁湯が帰宅すると、
「御孫が誕生なさいました」
と奴婢が報告した。
「めでたい。男か、女か」
「男の子が二名です」
「双子だな」
「いいえ」
「ん？」
「異腹です。二人の妊婦が、たまたま同日の同刻に出産なさいました」
「珍しいこともあるものだ」
「それだけではありません。誕生の直前、空が黒煙に曇りました。二つの光が、別の部屋にいる妊婦に向けて、それぞれ突き進み……」
「夢だろう」
「屋敷にいる全員が見ています」
どやどやと家属が集まってきて、真顔で、目撃したことを証言した。
「まさか」
と否認しつつも、袁湯もまた、天候の変化を見ている。光の行く先までは確かめられなかったが、あながち、嘘ばかりとは思えなかった。
「光はどうなった」
「怪しい光は、産後まもない赤子のなかに入りました。二人ともにです」
「この現象は、吉かな、凶かな」
当主である袁湯の質問に、一同は口を揃えて、「吉です」と答えた。
「天子が即位された日に――いや、袁湯さまが三公

になられた日に、生まれた御孫です。この子たちの誕生が、凶であるはずがありません」
「宜しい。祝いの準備だ」
袁氏の邸宅は、三日三晩、祝宴を行った。同日に生まれた二人の子は、母の身分が高い順に、
袁術
袁紹
と名づけられた。
本初元（一四六）年のことである。

◆第二回　梁山泊

新しい天子が即位してから七年が経った。梁冀・袁湯による政権は続いている。
永興元（一五三）年の七月、黄河が溢れて、流域の農地を破壊した。数十万戸が飢饉に陥り、食糧を求める人民の群れが、各地を流亡した。[五]
数ヶ月後、徐々に水が引くにつれ、黄河の最下流の青州で、異状が発覚した。
「み、湖だ」
「河水が低地に貯まり、排出されなかったようだ」
「まんなかに島がある」
「ただの陸地だったのに……」
済南郡の北部、黄河に面したところに、未知の湖が出現した。
黄河は、しばしば流れの経路を変える。河底の高低差や、蛇行する水流の方向によって、周囲の地形が変わる。決して珍しいことではない。
「朕の代になってから、ろくなことがない」
落ち込む天子を見て、袁湯が、
「有能な人材を、たくさん知っております。学識があり、とりわけ治水に通じたものを推挙しますので、彼を済南の国相に任じてください」
と提言した。
「宜しく頼む」
そういうわけで、新任の国相が到着した。現地を視察し、新しい湖を指さして、
「梁山湖」
と命名した。
副官が理由を聞くと、国相は得意げにいう。
「建国の功臣にちなんだ」
「ますます、分かりません」
この国相は、知識をひけらかして、周囲を困らせる癖がある。
「世祖のころ、赤伏符という図讖に、『王梁は玄武となる』という記述があったという。世祖は、臣下の中から、王梁という姓名のものを探しあてた。玄武とは、水神の名である。だから、王梁に治水事業を任せたのだ」
「聞いたことがあります」
世祖たる光武帝の言動は、官僚層に周知されている。光武帝は、神秘的な予言書である図讖を好み、実務にも使ったという。
測量の指示を出しながら、国相がいった。
「むかし王梁は、図讖の記述を裏切って、治水に失敗したという。彼は退官を願い出たが、世祖は憐れに思い、地方に転任させた。その任地が――」
「ここ済南国[六]」
「そう。湖に浮いている島は、かつて王梁が登り、国土を見渡した山だという」
「王梁の山の湖」
「そう。だから梁山湖。うまい名だろう。もっとも私の場合、百年前の王梁とは違って、治水を成功させるつもりだがな」
国相は、愉快そうに腹を揺らした。
この王朝において、言葉をたくみに操ることは、政治的な営為である。さすが、袁湯に推薦された逸材だけあって、機転が利いた。
地形を見ながら、国相はいう。
「太古より、ここ青州は、盗賊の発生源だった。梁山湖を残しておけば、奴らに住処を与えるかも知れない。うまく溝をうがち、溜まった水を導き、黄河に返すべきだろうな」
「卓見です」
副官は、さっそく人員の確保を始めた。しかし、飢饉の直後である。労役に服せるものが、なかなか集まらない。準備に手間取っているうちに、この国相は、別の地域に転任していった。
はじめ済南国の住民は、梁山湖を怪しみ、近寄ろうとしなかった。しかし年数が経つにつれ、湖に魚が住み着くようになり、漁師の生活の場となった。市場が立ち、ひとが集まった。水深が低い湖を「泊」ということから、[七]親しみをこめて、
梁山泊
と呼ぶようになった。
国相が与えた名を、そのまま使うのは、住民たちにとって愉快なことではなかったからである。
ある日、梁山泊に停泊させてあった漁師の舟のう

ち、一艘が消えていた。
「もやいの綱をきちんと結ばなかったから、流されてしまった……」
持ち主は、舟を探すことにした。ところが、梁山泊の湖面は広く、霧が掛かっている。陸地から全てを見渡すことができない。仲間から舟を借り、水面に漕ぎだした。半日かけて、湖の上を丹念に回ったが、発見できなかった。
「まんなかの島に、流れついているかも」
島の岸を遠目に見て、ゆっくりと一周した。幸いなことに、自分の舟が浅瀬に乗り上げ、傾いているのを見つけた。
「よかった」
島に上陸して、舟に駆けよった。
「うわっ」
舟のなかは、ひどく汚い。草木が千切れて入っただけでなく、腐った布片があり、ひとの汗や尿のような匂いもする。
「だれかが乗ってきた?」
危険を感じ、四方を見渡した。舟を盗んで漂着した人物が、こちらを見ているかも知れない。恐くなったので、もとの舟で戻った。
「部外者が入りこんだ」
漁師が、顔役にあたる父老に報告した。
父老は、
「放っておけぬ。調査しよう。武器が使えるもの、弁舌が得意なものは志願しなさい」
と呼びかけた。
はじめの漁師が舟を漕ぎ、父老を筆頭とした六人が同乗して、再び島を訪れた。
「おーい、誰かいるんだろう。出てこい」
「われらは役人ではない」
「そちらが手を出さねば、何もしない」
「腹が空いておろう。飯を持ってきた」
島を巡って呼びかけた。
木々のあいだから、ぼろぼろの服を着けたひとが、よたよたと這い出た。
「だれだ」
一斉に取り囲んだ。
殴打によるものか、顔の形が歪んでいる。髪やひげは、むしり取ったように疎らである。かすれた声で、身を伏せて懇請した。
「た、頼みます……、私に関わらないで下さい」
「そういう訳にもいかぬ」
「まず、姓名をいえ」
「事情があって……、言えません」
「罪を犯して、逃げているのか」
「そう思ってもらっていい」
含みのある答え方だった。一同に、尋問の経験などないから、これ以上、言葉が思い浮かばない。
「悪いやつではなさそうだ。飯をやろう」
父老が結論づけた。
逃亡者は、梁山泊にきてから数日、昆虫や木の根しか食べていなかった。涙を流しながら、穀物をむさぼった。食べ終わると、
「恩に着ます」
と厚く謝礼した。
「ところで、ここは何という所ですか」
「梁山泊」
「梁山泊に、私を住まわせて下さい」
「べつに、俺らが管理している土地じゃないさ。洪水があってから、誰も来なくなった不毛の地だ。どこからも孤立した別天地みたいな……」
「それはありがたい。今日のように腐敗した漢家とは、縁を切りたいと思っていました」
「よく分からんが、複雑な事情があるんだね」
「はい。私は夏馥(八)といいます」
突然、逃亡者が名乗ったから、一同は顔を見合わせた。
「どうせ偽名なら――」
「偽名ではありません。ここで暮らすには、農耕・漁労など、あなた方に教わる必要があります。偽名など使いません」
「夏馥さん」父老が手を差し伸べた。「事情を話してくれないか」
「はい。私は、陳留の生まれです。ところで皆さんは、朝廷のことをご存知ですか」
「知るわけがない」
「そうでしょうね……。朝廷は、大将軍の梁冀、司空の袁湯などが仕切っています。彼らは、威張り散らしているだけで、実害は少ないと思います。ほんとうに悪辣なのは宦官です」
「へえ」
地方の民は、なにも知らない。反応の薄さに構わずに、夏馥は話した。
「故郷には、宦官と癒着して、賄賂を得ている豪商がいました。人々は畏れ、豪商の言いなりでした。しかし私は不正を憎み、交際を拒みました。結果、宦官のために無実の罪を着せられ、逃亡するに至ったのです」

「ひどい話だ」
「どこも同じようなものです。友人の張倹も、罪を着せられ、諸国を逃げ回りました。幸いにして捕まらなかったが……、彼が通過した地方の家々は、加担者と見なされ、罰せられました」
「理不尽な――」
地方の事件なら、わがことに置き換え、想像することができる。それどころか、このように夏馥と接触した時点で、すでに当事者かも知れない。
父老は、夏馥を見つめた。
「まつりごとは、そんな状況なのか。俺たちには、太刀打ちする方法がないのか。ある日突然、なんの前ぶれもなく罰せられるなんて、納得がいかん」
住民らも、心配そうである。
夏馥は、あきれた顔をつくって、
「おかしな罰から免れるには、金を出すしかありません。むしろ宦官は、罪の内実には興味がなく、金を巻き上げる口実を作りたいだけです」
と解説した。
「なんてことだ」
「たった一人の無実のひとが逃げ回ることで、禍いが一万の家に及びます。宦官の思うつぼです。だから、梁山泊に住みたいのです」
「梁山泊は無人――どころか、一頭の獣もいない荒地。どこかの山林にひそみ、炭の商いでもやれば良さそうなものだが」
ひとりが口を挟んだ。
「もう試しました。こんなふうに顔を変え、炭を売り歩きました。ところが偶然、公務で通りかかった弟に気づかれました。声で分かったと。弟は匿ってくれると言いましたが、迷惑はかけられない。だから彷徨していました」
「で、梁山泊か」
「そうです」
「分かりました。夏馥さん、あなたが邪悪なひとではないと、初めから分かっていた。生活に必要なものは、運びこみましょう」
父老が承諾した。
夏馥は、見よう見まねで、梁山泊での生活を始めた。父老の指示により、住民は、しぶしぶ夏馥を手伝った。しかし、未開の地を拓くという事業を、楽しいと感じるひともいる。梁山泊は栄え、八百人ほどが生活するようになった。

諸国を逃げている夏馥の友人が、梁山泊に避難してきた。范滂・張倹[九]である。
「よくぞ、来てくれた」
夏馥が陽気にもてなしたが、張倹は、
「逃げ回ったせいで、関与した十余の家が、宗族もろとも殺された。郡県の府も破壊された……」
と悲歎した。
「梁山泊にいれば、もう安心だ。ときに、近ごろの洛陽の情勢はいかに？」
夏馥が聞くと、范滂が陰鬱に答えた。
「宦官の攻勢がつよい。清廉な官僚を選び、順番に殺しているようだ。陳蕃さまが、ひとりで抵抗しておられるが、いつまで保つか」
「陳蕃さまが敗れたら、もう終わりだ」
「まあ、そう思い詰めずに」
二人を励ますため、夏馥は、建設の途上にある集落を案内した。
「ここにいれば、宦官の手は及ばない」
「しかし、籠もっているだけでは、意味がない。朝廷から、宦官を駆逐せねば」
「そうかも知れないが……」
夏馥は、情報が届かない洛陽のことよりも、梁山泊の経営のほうに熱を注いだ。范滂・張倹は、夏馥の姿勢に違和感をもちながらも、しばらく梁山泊に逗留するしかなかった。[十]

梁山泊が出現した十五年後、天子が崩じた。孝桓皇帝と諡号された。
桓帝の在位期間、空が暗転するという異変が頻発した。暗くなる場所は、洛陽に限らない。全部を数えたひとはいないが、地方からの報告を集計したところ、百回を超えた。暗転のつぎに、光が降り注ぐのが、共通の現象だった。
たびたび、士大夫の邸宅にも光が飛びこんだ。決まって、新生児のある家である。しかし荒唐無稽なことだから、そとで情報が共有されることはなく、家のなかで会話にのぼる程度であった。
誕生時の怪異は、帝王の出現を予感させる。野心のある人物などは、この光を見ると、
「ついに、わが家から帝王が輩出される」
と期待した。ただし、公言したら大逆の罪となる。胸のなかで思うか、せいぜい近親者と囁きあうだけだった。
桓帝は、度重なる暗転のせいで、不徳の君主という評価を受け、政治に情熱を持てなかった。唯一、積極的に行ったのが、梁冀の排除である。宦官に協

力をあおぎ、梁冀を殺害した。結果、宦官はさらに大きな権限を得た。
曹節・王甫
が、とりわけ重用された。

天子が崩じたとき、太子がいなかったから、傍系の皇族を地方から迎えることにした。召された皇族が、洛陽の郊外に停泊していると、昼下がり、
「食べ物を持参しました」
と、訪ないを入れた人物がいた。
「だれだ」
門番の警戒は厳重である。
「少黄門の張譲です」
「宦官だな」
「はい。殿下におかれましては、遠路、お疲れのことと思い、美味の品を持参しました」
張譲が口上を述べた。
「殿下はだれにも会われない」
門番はすげない。
「そう仰らず……」
あと数日で、皇帝になることが約束された人物である。顔を繋いでおけば、政争が有利になる。張譲に限らず、こうして訪問してくる人物は少なくなかった。門番は、断ることに慣れている。
「あなた方も、ご精勤でお疲れでしょう」
張譲は笑顔をつくり、もちあわせた金銭をくるむと、門番に与えた。彼らは手を上下に動かして包みの重量を確かめ、
「殿下は、誰にも会われない」
と念を押した。
「そう仰らずに……」
「われらは殿下の命を守らねばならん。食べ物を持参したというなら、毒味をしてやる」
「は、はい……」
張譲は、皇族への贈り物を開封し、珍しい果実を取り出した。
「おお、うまいな」
門番は、次々とおかわりを要求して、あれよあれよと、全てを食い尽くしてしまった。
「ありがとう。佞臣がここを通らぬよう、警備をがんばれそうだ」
と言い捨て、追い払う仕草をした。張譲は、全財産を投げうって賄賂をした甲斐もなく、門を通れなかった。
「さっさと消えろ」
槍の柄で小突かれた。
「このままでは……」
門から離れながら、張譲は独言した。
「このままでは、曹節・王甫に、首座を独占されたままだ。いい方法はないものか」
そばに誰もいないので、本音を口にした。未練がましく、停泊所の周囲をうろついた。臨時に手当てした施設なので、高い塀などない。なかから、人々の騒ぐ声が聞こえる。
――乗り越えるか。いや、いかん。
発覚したら殺される。そんな手段は、選ぶべきでない。怨めしそうに塀を見つめていると、
「あーっ」
という甲高い声が聞こえ、追って、まんまるの蹴鞠が、塀をまたいで飛んできた。
「やっ」
反射的に、張譲は蹴り返した。
彼は出自が賤しくなかったが、子供ころから悪さばかりして、一族のなかで持て余された。知人をたらい回しにされ、犯罪まがいの事件ばかり起こすから、面倒を見てくれる家がなくなり、しまいには去勢されて宮中に送りこまれた。そんな張譲の特技が、蹴鞠だったのである。
「おーっ」
塀のなかで、歓声があがった。
「塀の向こうの御方」
壁を隔てて、呼びかけられた。
「何でしょう」張譲が答える。
「蹴り返したのは、あなたですか」
「そうです」
「見事な技量です。あらぬ方向に蹴ったのに、ちょうど私のところに、蹴鞠が戻ってきた」
「軌道を見れば、分かります」
「いや、並みの技術ではない。なかにきて、一緒に遊びましょう」
――私は低い身分です」
「蹴鞠の仲間に、身分は関係ない。天下円の会員を集めています。加わりませんか」
「滅相もないことです」
「名は？」
「お耳を汚す価値もありません……」
張譲が、心にもない謙遜をくり返していると、先ほどの門番が、走り寄ってきた。
「殿下がお呼びです」
「殿下が？」

「よく分からないが、塀の外側、この位置に立っているものを招くようにと」
門番の態度が、変わっている。さっき財物を奪った手前、気まずそうでもある。
「案内をお願いします」
張譲は、門番を蹴り飛ばしたい気持ちを抑え、偶然が与えてくれた好機を喜び、ここが勝負どころだと念じ、努めて謙虚に応じた。
会ってみれば、つぎに天子になるという皇族は、十二歳の少年だった。
少年は、挨拶よりも先に、鞠を蹴ってよこした。張譲が鞠をさばく。まるで身体に、にかわを塗ったかのように、鞠がぴたりと離れない。つまさき、頭、背、肩、と鞠を移して操った。
「すごい、すごい」
少年が満足したのを見てから、受けやすい位置に蹴り戻した。
「名を知りたい」
「小黄門の張譲です」
「私が宮殿に入ったら、そばに侍るように。蹴鞠を教えてほしい」
少年は、皇族の傍系の生まれだから、地方の都市で成長した。かつて張譲が吸っていたのと同じ、裏路地の空気を好んだ。知人のいない洛陽に転居する心細さのなか、同類の人間を見つけて心を開くのは、無理のないことであった。
建寧元（一六八）年、正月、少年が洛陽に迎えられ、天子に即位した。霊帝である。
「張譲に政治を任せる」
と不見識なことを言ったが、認められるはずがなく、陳蕃が太傅となって、新しい天子を守り立ててゆくことになった。
陳蕃とは、志のひとである。
少年時代、ずっと室内に閉じこもって、天下のことを思い悩んだ。あるとき、父の友人が家に訪れ、陳蕃を叱った。
「なぜ庭を掃き清め、私をもてなさぬ」
「大丈夫たるもの、天下を掃き清めねばなりません。どうして庭先などに構っていられますか」
大人たちは、陳蕃を激賞した。
梁山泊にいる夏馥・范滂・張俭が、期待を寄せていたことからも分かるように、陳蕃は心正しき人々にとっての希望である。
数十年にわたって宦官との政争をくり広げ、七十余歳にして、今日、政権の中枢に至った。
ただちに上疏して、
「天子が替わり、変革の好機です。天下を乱している者を誅殺すべきです。中常侍の曹節・王甫。この二名は、先帝の時代から、害毒を垂れ流してきました。罪は明白です」
と主張した。
名指しされた二名は、殺されてなるものかと焦って、詔書を偽造した。
「先帝が崩じ、日が浅いにも関わらず、陳蕃は巨億の財産を蓄え、毎日のように酒宴を楽しんでいる。彼こそ国家の弊害である」と。
事実無根である。
なりふり構わず、宦官の集団は先手を取って、黄門の兵を動員した。
陳蕃は、政庁にいるところを囲まれた。
「詔により捕らえる」
即日、陳蕃は殺害された。
「恐ろしい男だった」
王甫は曹節に、陳蕃の最期を語った。
「兵に囲まれても動ぜず、剣を私に向けてきた。兵のほうが怯えて、包囲が崩れた。あのように気概のある人物が、士大夫の頂点にいる限り、われらの天下は来なかっただろう」
「しかし、陳蕃は死んだ」
「ふふ。陳蕃の家属は、南の果ての比景に移す。宗族・門生は、永遠に官職に就かせない」
ふたりは、勝手に処置を決めてしまった。宦官の権力は、これにより確立された。
曹節・王甫の下位にあって、張譲には、まだ活躍の場がない。毎日、天子に蹴鞠を教えて信頼を得つつ、席次を駆けあがれる時期を待った。
翌、建寧二（一六九）年。天子が温徳殿に群臣を集め、玉座に就こうとすると、にわかに狂風が起こり、青蛇が梁の上から落ちてきた。長さは二十余丈もあり、玉座にわだかまった。
天子は気絶した。
衛兵が駆けよると、すでに青蛇は消えていた。[十二]
「なぜ青蛇が現れた？」
息を吹き返した天子が、切実に下問したが、答えられる廷臣はいなかった。
――宦官の専権に、天が怒っている。
と言おうものならば、良くて罷免、悪ければ三族の皆殺しに遭うであろう。陳蕃の死は、士大夫層か

ら希望を奪い、政治を腐らせた。

これ以降、すべての情報は宦官によって握りつぶされ、天子には政事の案件が回らない。

――退屈すぎる。

暇を持て余した天子は、学問に興味を持った。青蛇の意味するところは何か。まずはそれに答えてくれそうな、学識ある人物を求めた。書庫をうろつき、めぼしい上書を探した。

――おや、これは。

山積された竹簡のなかで、異彩を放っているのは、無官の人物が提出した意見書である。行間ににじみ出る学識、緻密な論の展開、そして何より、色の美しい竹材と、雄大な書体。天子は、この意見書の提出者に、恋に近い感情を持った。

天子の目にとまったのは、誰の上書なのか。次回に続きます。

注　釈

〔一〕范曄『後漢書』巻六　順帝紀（以後、范曄『後漢書』を出典するときは書名を省略）。原文の地震の回数は「百八十」であるが、『水滸伝』にゆかりのある「百八」とした。

〔二〕『三国演義』第一回で、張角に教えを授ける仙人。『水滸伝』第一回の張天師は、後漢末の張魯の末流であり、順帝期に教派が存在し得ないため、置き換えた。

〔三〕『水滸伝』第一回では、龍虎山。

〔四〕列伝二十四　梁冀伝

〔五〕巻七　桓帝紀

〔六〕列伝十二　王梁伝

〔七〕宮崎市定『水滸伝　虚構のなかの史実』第九章より。『水滸伝』の梁山泊は、西暦九四四年の洪水で形づくられた。

〔八〕『水滸伝』白衣秀士の王倫を、夏馥に準える。夏馥の経歴は、列伝五十七　党錮　夏馥伝から。

〔九〕『水滸伝』摸着天の杜遷を范滂に、雲裏金剛の宗万を張俭に準える。いずれも列伝五十七　党錮に列伝があり、夏馥とともに亡命した。本作では列伝をなぞって物語を記さないが、とくに描写しない限り、裏設定として列伝どおりの経歴をもつ。

〔十〕のちに范滂は捕らえられ、尋問する王甫を論破するが、一六九年に獄死（党錮　范滂伝）。張俭の結末は本作で描く。

〔十一〕『三国演義』第一回より。本作は、『三国演義』で語られる人物の前史という扱いなので、作中の出来事や世界観は『三国演義』と共通させる。